

令和 7 年度
入学試験問題

国語

2 月 3 日 第 1 限

仁愛女子高等学校

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。なお、本文の段落には①～⑱の番号が付してある。)

- ① 十九歳のとき、師に出会った。師とはカトリックの司祭で、神学者でもあった井上洋治である。一九二七年に生まれ、二〇一四年三月八日に八十六歳で亡くなった。今年で没後十年になる。
- ② 亡くなってからの歳月で痛感しているのは、師の生涯と境涯^{きやうがく}に対して浅薄な認識しか持ち得なかったという現実で、没後しばらくして、師の著作を読み返したとき、あまりのシンセンさに驚愕した。それは今も続いている。
- ③ 一九五〇年、二十三歳のとき神父は、修道院に入るために渡仏するのだが、その船に乗り合わせたのが遠藤周作^{えんどうしゅうさく}だった。このひと月の船旅が二人を文字通りの親友にした。遠藤との関係もあつて、神父は文学者との交流も深かった。宗派を問わず、同時代のキリスト教作家の多くは、神父と何らかの接点があつたように思う。私にとって神父は、信仰上だけでなく、文筆の上でも師となった。神父に出会わなければ物書きにはなっていなかったと思う。
- ④ 師は、弟子に甚大な影響^{じんだい}を与える。A、真に師と呼ぶべき人物は、弟子を自分の色に染めるようなことはしない^①。その人の内面からその人自身の色が浮かび上がるのを助け、その人を自身のBへと誘う。
- ⑤ 生活と人生は似てCなるものである、と遠藤はいう。どんなに熱心に生活の次元を生きても人生の問題に遭遇^(b)することはできない。他者と競う。誰かよりも秀でたいと思う。人よりも何かを多く所有したいと感じる。こうした試みに人生を賭ける^かこともできない。それらはすべて、生活の次元のことだからである。
- ⑥ いっぽう、世にいう生活の苦勞の多くは、人生の次元で営まれる。耐え難い悲しみや屈辱、苦しみや嘆き、言葉にならない呻き^{うめ}を感じながら生きる日々こそが人生の道を切り拓く。
- ⑦ 神父は四十九歳のとき『日本とイエスの顔』と題する最初の著作を世に送った。この本で彼は「知る」という営みには二つの態度がある、と述べている。何か「を」知ると何かに「ついて」知る、の二つである。
- ⑧ ある人を知ると、その人について知るのと同じではない。人生を知ると、人生について知るのも、まったく異なる経験である。
- ⑨ 神父は、じつに魅力的な人物で、人生は生きるに値するということ^②を語らずして体現していたが、晩年、大きな誤り^(c)をオカした。過^{あやま}ちではない。自己認識を誤ったのである。

10 老年になって神父は、目を患^{わづら}った。司祭としても文筆家としても目に不自由さを抱えたことは深刻な影響を与えた。あるときから神父は、人前にいっさい姿を見せなくなった。面会を求める人の申し出も静かに退^(d)けて、ごく限られた人にだけ会うという生活になった。

11 亡くなる二ヶ月ほど前のことだったと記憶している。話したいことがあるので自宅に来てほしいと連絡があつた。用件は遺言^{ゆいごん}のような遺稿を預かることだった。神父はその原稿に込めたおもいを言葉少なに、

A

重み^(e)をカラム^(e)けるようにしながら細い声でこう言った。

12 「私は……ここからここへ語りたい、それだけなんだ」

13 師と過ごした三十余年の月日で、このときほど自らのところに深みをはっきりと感じたことはなかった。こころの深い場所から発せられた言葉は相手のこころの深部に届くからである。

14 これほどまでにちからのある言葉を発し得る人が、どうして人を遠ざけるようになったのか。改めて不思議に思い理由を尋ねると神父は「かつてのように考えることも話すこともできないのは分かっている。もう以前のようにには役に立てない。会う人を失望させたくもないんだ」と語った。

15 神父は良寛^{(注3)りょうかん}をこよなく敬愛していた。「裏を見せ 表を見せて 散る紅葉^{もみぢ}」、良寛^{(注4)りょうけん}の辞世^{じせい}の作と伝えられ、神父は一度ならず、この句を自著で引用している。

16 人生の晩節での神父の大きな誤認は、自らの存在意義を有益だと感じる「表」に限定したことだった。^④「裏」に秘められたものを見過ごしていたのである。

17 師よ。私はあなたから幾つもの大切なことを学んだ。信仰、文学、哲学、そして人生の問題においても。

18 しかし、^⑤もつとも豊かな、そして、かけがえのないことは、あなた自身が

C

力だと感じる、そんなあなたから学んだのです。

19 師よ、あなたは自分を見誤った。無力だと感じられたあなたこそ、沈黙のうちに、生きる意味をもつとも確かに体現していたのです。

(若松英輔^{わかまつえいすけ}『自分の B に出会うために必要ないくつかのこと』による)

(注) 1 今年で没後十年になる——右の文章の初出は「日本経済新聞」二〇二四年三月九日。

2 遠藤周作——小説家(一九二三〜一九九六)。代表作に『海と毒薬』『沈黙』『深い河』など。

3 良寛——江戸時代の僧侶・歌人(一七五八〜一八三一)。

4 辞世——この世に別れを告げること。また、その時に残す詩歌や言葉。

問一 二重傍線部(a)「シンセン」・(c)「オカ」・(e)「カタム」のカタカナを漢字に直せ。(楷書^{かいしよ}ではつきり大きく書くこと。)

問二 二重傍線部(b)「遭遇」・(d)「退」の読みをひらがなで書け。

問三

A

 に入る言葉として最も適当なものを選び、記号で書け。

ア なぜなら

イ だから

ウ だが

エ ただ

問四

B

 に入る言葉として最も適当なものを

3

 ～

9

 段落の中から抜き出し、そのまま書け。

問五

C

 に入る文字として正しいものを選び、記号で書け。

ア 無 イ 非 ウ 違 エ 異

問六 傍線部①「ない」・③「大きな」について、品詞の組み合わせとして正しいものを選び、記号で書け。

ア ① 形容詞 ③ 形容詞

イ ① 形容詞 ③ 連体詞

ウ ① 形容詞 ③ 形容動詞

エ ① 助動詞 ③ 形容詞

オ ① 助動詞 ③ 連体詞

カ ① 助動詞 ③ 形容動詞

問七 傍線部②「人生は生きるに値するということを語らずして体現していた」とあるが、なぜ神父はそれができたのか。①～⑨段落中の言葉を用いて、十五字以内で説明せよ。その際、次の文を踏まえること。

《について知る》という、理性と概念による自然科学的なものにとらえ方、合理主義的な発想にあまりにも慣らされすぎてしまった現代の私たちは、ここで、日本文化が長いあいだいせつにしてきた《を知る》というものにとらえ方を思い出し、《について知る》ことだけが唯一の知識であるという偏見を思いきって打ち破る必要があると思います。

（井上洋治『日本とイエスの顔』による）

問八 傍線部④「『裏』に秘められたもの」とは何か。⑮～⑲段落中の言葉を用いて、三十字以上四十字以内で説明せよ。

問九 傍線部⑤「もつとも豊かな、そして、かけがえのないこと」とはどんなことか。「……ということ。」に続くように⑩～⑭段落の中から三十字で抜き出し、初めと終わりの五字をそのまま書け。

問十 傍線部⑥「師よ、あなたは自分を見誤った」とあるが、その理由は何か。「……と、認識できなくなったから。」に続くように①～⑨段落の中から最も適当な一文を抜き出し、初めの五字をそのまま書け。

問十一 筆者が神父に抱いている感情として**適当でないもの**を選び、記号で書け。

- ア 哀惜
- イ 感謝
- ウ 敬愛
- エ 侮蔑

問十二 波線部「良寛の辞世」として「裏を見せ 表を見せて 散る紅葉」の他に

形見とて なに残すらむ 春は花 夏ほととぎす 秋はもみぢ葉
という和歌が知られる。

これは、次の道元（一二〇〇～一二五三）の和歌

春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて すすしかりけり
を元になっている。

また、松尾芭蕉（一六四四～一六九四）は『おくのほそ道』に

五十丁山に入りて、永平寺を礼す。道元禪師の御寺也。邦畿千里を避けて、かかる山陰に跡をのこし給ふも、貴きゆゑ有りとかや。
と記している。

右の道元の和歌を参考にして、あとの『おくのほそ道』所収の詠から秋の句をすべて選び、記号で書け。
ただし、五十音順で答えること。なお、（ ）内は現在の都県名である。

ア	草の戸も住み替はる代ぞ雛の家	（東京）
イ	野を横に馬牽きむけよほととぎす	（栃木）
ウ	桜より松は二木を三月越し	（福島）
エ	あやめ草足に結ばん草鞋の緒	（宮城）
オ	五月雨の降りのこしてや光堂	（岩手）
カ	閑かさや岩にしみ入る蝉の声	（山形）
キ	象潟や雨に西施がねぶの花	（秋田）
ク	荒海や佐渡によこたふ天の河	（新潟）
ケ	早稲の香や分け入る右は有磯海	（富山）
コ	庭掃きて出でばや寺に散る柳	（石川）
サ	月清し遊行の持てる砂の上	（福井）

（注）ねぶの花 —— 合歓の花

二 次の【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読んで、あとの問いに答えよ。（設問の都合上、文章には改変・省略した箇所がある。）

【文章Ⅰ】

人のなきあとばかり悲しきはなし。亡くなつたあとほど中陰ちゆういんのほど、山里などにうつろひて、死後四十九日の間便びんあしく狭せはき所にあまたあひ居て、移り住んで後ののちわざども
営みあへる、心あわたたし。ひかず日数の A 過ぐるほどぞものにも似ぬ。不便な果ての日は、いと情なう、たがひに言ふ事もなく、大勢 集まつて
我かしこげに物ひきたため、ちりぢりに行きあかれぬ。分別銀でびいびい荷物を取りまとめてもとの住みかに歸りてぞ、更に悲しき事は多かるべき。中陰の終わる日 薄情にも「しかしかのことは、
あなかしこ、あとのため忌むなる事ぞ」など言へるこそ、かばかりの《 B 》なかに何かはと、人の心はなほうたておぼゆれ。やはり情けなく
年月へてもつゆ忘るるにはあらねど、去る者は日々に疎うとしと言へることなれば、さはいへど、その際きはばかりは覚えぬにや、よしなしこと
言ひてうちも笑ひぬ。遺骸からは、氣うとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣まうでつつ見れば、ほどなく卒都婆そとばも苔むし、木葉このはふり
埋うづみて、夕ゆふへの嵐、夜の月のみぞ、こととふよすがなりけり。命日思ひ出でてしのぶ人あらんほどこそあらめ、そも又ほどなくうせて、供養塔
聞き伝ふるばかりの末々は、あはれとやは思ふ。子孫 感慨深く思うだろうか、いや、思わないさるは、跡とふわざも絶えぬれば、いつれの人と名をだに知らず、年々の春の草の
みぞ心あらん人はあはれと見るべきを、はては、嵐にむせびし松も千年ちとせを待たたききで薪たききにくだかれ、古き墳つかはすかれて田となりぬ。その
形かただになくなりぬるぞ悲しき。
(第三十段)

典型的な C 観に裏打ちされた名文であるが、詠嘆感傷の色合いが濃い。声に出して読んでみると、一層そのことがわかる。
私は、今年 D をはじめ、親しくしていた友人を三人も亡なくしているので、E のこの文章は、美文調であるだけに、胸に
迫る。

次の第百五十五段は、私にとっては、『徒然草』といえはこの文章が直ちに浮かんでくるほど心に深く刻まれている一節である。

春暮れてのち夏になり、夏果てて秋の来るにはあらず。春はやがて夏の氣を催し、夏より既に秋は通ひ、秋は則ち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり梅もつぼみぬ。木の葉の落つるも、先づ落ちて芽ぐむにはあらず。下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣、下に設けたる故に、待ちとるついで甚だはやし。生・老・病・死の移り来る事、又これに過ぎたり。四季はなほ定まれるついであり。死期はついでを待たず。死は前よりしも来らず、かねて後に迫り。人皆死ある事を知りて、待つこと、（第百五十五段・部分）

四季の移り変わりには一定の順序があるが、「F」「覚えずして来る」。しかも「その死に臨める事、軍の陣に進めるに同じ」（第百三十七段）で、死ほど確実にやってくるものはない。

「いつかは死なねばならなかつたのだ、一度は来ると思つてゐた、さういふ知らせを聞くときが。あすが来、あすが去り、そしてまたあすが、かうして一日一日と小さきみに、時の階を滑り落ちて行く、この世の終りに辿り著くまで。いつも、きのふといふ日が、愚か者の塵にまみれて死ぬ道筋を照してきたのだ。消えろ、消えろ、つかの間の燈火！ 人の生涯は動きまはる影にすぎぬ。あはれな役者だ、ほんの自分の出場のときだけ、舞台の上で、みえを切つたり、喚いたり、そしてどのつまりは消えてなくなる。」

⑦（注）
シェイクスピアは、人生は、自分の出場のときだけ、舞台（世の中）の上でみえを切つたり、喚いたり、ときには沈黙して、自分に合った役割を演じて消えていくというが、実際の人生、つまり生きているということは、自分の出場がなくとも生き続けていかなければならない。「とどのつまりは消えてなくなる」のは確実であるにしても、それまでは舞台のそでで幕が下りるのを静かに待つことにしよう。

（北連一『五十歳から読む「徒然草」』による）

（注）1 出場——出るべき場面。

2 シェイクスピア——イギリスの詩人・劇作家（一五六四～一六一六）。

【文章Ⅱ】

ある学生に「ボクはなんのために生きているのでしょうか」と問われたことがある。「わからない」と答えることをゆるさないような顔つきだった。茶化すことはできないと覚悟して、わたしは答えた。「その問いに答えはないんじゃないかな。問いそのものが、すでに答えだから。そんなふうに関うことができるってことが、生きているということなんだよ」。

⑧ 季路問事鬼神。子曰、未能事人、焉能事鬼。曰、敢問死。曰、未知生、焉知死。

季路鬼神に事^{つか}ふることを問ふ。子曰はく、「未^{いま}だ人に事^{あた}ふる能はずんば、焉^{いづ}くんぞ能く鬼に事^{いづ}へんや。」と。曰はく、「敢^あへて死を問ふ。」と。曰はく、「未^{いま}だ生を知らず、焉^{いづ}くんぞ死を知らんや。」と。

子路「死者の霊をなぐさめるにはどうすればよいでしょうか」。先生「生きている人間すらなぐさめられないのに、どうして死者の霊をなぐさめられようか」。「じゃあ、死とはなんでしょうか」。「これまでどう生きてきたかとか、これからどう生きてゆこうかということより、いまだどう生きるかということのほうが大切だ」。

先祖の霊を供養^{くよう}するのもよいが、そんなヒマがあったら親に孝行しなさい、と孔子はいう。生きている親をほったらかして、死んでしまった祖先の霊の祀^{まつ}り方を気にかけるなんて、それじゃアベコベだよ、と。

「死とはどういうことですか」と重ねて問われ、孔子はいう。死んでからあとのことなど考えてもしようがないんだから、いま生きている時間を大切にしなさい、と。

そのつど「いま・ここ」を精一杯に生きればよい。もう起こってしまったことを G したり、まだ起こっていないことに H したりしていると、生きてゆく元気がなくなる。

現在をそのつど存分に生き尽くすためには、過去の軌跡を引きずるのは禁物である。「せっかく一流の大学を出たのに、こんな仕事をしてるなんて情けない」とボヤクのは情けない。現在の自分を肯定できないのは、過去の自分を否定するのといっしょである。

人生は、いかなる時期も、たんなる準備期間ではありえない。さきざきの人生設計のために、むやみに禁欲すべきではない。かといって、もっと楽しいことがあるはずだと青い鳥をさがして I するのもみつともない。そのつど「いま・ここ」を楽しんでいけばよい。

(山田史生^{やまだ ふみお}『孔子はこう考えた』による)

(注) 子路——「季路」と同一人物で、孔子の弟子(紀元前五三〇紀元前四八一)。

問一 に入る言葉として最も適当なものを選び、記号で書け。

ア はやく イ おそく ウ おもく エ かるく

問二 《B》において省略されている語を補うべく【文章Ⅰ】の『徒然草』第三十段から適当な言葉を五字以内で抜き出し、そのまま書け。

問三 に入る言葉を、次の文を参考にして、漢字二字で書け。

ぎをんしやうじや
祇園精舎の鐘の声、諸行 の響きあり。（『平家物語』）

問四 に入る言葉として最も適当なものを選び、記号で書け。その際【文章Ⅰ】の『徒然草』第百五十五段を踏まえること。

ア 父 イ 母 ウ 兄 エ 妹

問五 に入る『徒然草』の作者を漢字で書け。

問六 に入る言葉を【文章Ⅰ】の『徒然草』第百五十五段から十字で抜き出し、そのまま書け。

問七 ・ ・ に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを選び、記号で書け。

ア	G	ウロチヨロ	H	クヨクヨ	I	ビクビク
イ	G	ウロチヨロ	H	ビクビク	I	クヨクヨ
ウ	G	ビクビク	H	クヨクヨ	I	ウロチヨロ
エ	G	ビクビク	H	ウロチヨロ	I	クヨクヨ
オ	G	クヨクヨ	H	ビクビク	I	ウロチヨロ
カ	G	クヨクヨ	H	ウロチヨロ	I	ビクビク

問八 傍線部①「もとの住みかに帰りてぞ、さらに悲しき事は多かるべき」とあるが、その理由として最も適当なものを選び、記号で書け。

ア 遺産相続など、煩わしい手続きに東奔西走しなければならぬから。

イ 薄情な遺族に接するにつけ、故人のことがいつそう偲しのばれるから。

ウ 葬儀の費用を工面するのに四苦八苦しなければならぬから。

エ 留守宅に賊が押し入り、家が荒らされているから。

問九 傍線部②「去る者は日々に疎し」の意味として最も適当なものを選び、記号で書け。

ア 死んだ人は年月が経つにつれて次第に忘れられるものだということ。

イ 死んだ人は生きている人からつねに忌み嫌われるものだということ。

ウ 死にゆく者に対して強しいて延命措置はしないということ。

エ 死にゆく者は昼も夜も絶えることがないということ。

問十 傍線部③「よしなしごと」の意味として最も適当なものを選び、記号で書け。

ア なさけないこと

イ たわいないこと

ウ やんごとないこと

エ みつともないこと

問十一 傍線部④「けり」を適当な形に活用させよ。

問十二 傍線部⑤「潮」は何のたとえか。【文章Ⅰ】の『徒然草』「第百五十五段」から一字で抜き出し、そのまま書け。

問十三 傍線部⑥「つかの間の燈火」は何のたとえか。【文章Ⅱ】から二字で抜き出し、そのまま書け。

問十四 傍線部⑦「シェイクスピア」とあるが、「日本のシェイクスピア」とも称される近松門左衛門ちかまつもんざえもんについて記した次の文章を読んで、
[]に入る作品をあとの【語群】から選び、記号で書け。

鯖江市立待地区で生まれ育ったとされる江戸時代の文豪、近松門左衛門の没後300年法要が命日に当たる22日、同市立待公民館前の近松記念碑庭園で営まれた。

近松は1653年、吉江藩士の杉森信義すぎもりのぶよしの次男として現在の鯖江市で生まれたとされ、幼少期の多感な時期を同市で過ごした。その後は京都、大阪と移り、人間の義理と人情の葛藤を描いた浄瑠璃じょうろうりや歌舞伎かぶきの作者として活躍。「[]」「国性爺合戦こくせんやかつせん」など傑作を多く書き残した。

〔2024年11月23日付け「福井新聞」の記事（一部省略）による〕

【語群】 ア 枕草子 イ 竹取物語 ウ 源氏物語 エ 曾根崎心中

問十五 傍線部⑧「季路問事鬼神」に返り点を施せ。（送り仮名・句読点は書かないこと。）

問十六 孔子と、その弟子たちの言行録で、【文章Ⅱ】の中の漢文「季路問事鬼神。子曰、未能事人、焉能事鬼。曰、敢問死。曰、未知生、焉知死。」を収める書物の題名を漢字で書け。

問十七 【文章Ⅰ】の『徒然草』第三十段と【文章Ⅱ】の内容の組み合わせとして最も適当なものを選び、記号で書け。

ア 『徒然草』第三十段は、先祖の供養は必要ないと述べているが、【文章Ⅱ】は、先祖の供養より今親孝行することが大事だと述べている。

イ 『徒然草』第三十段は、先祖の供養は必要ないと述べているが、【文章Ⅱ】は、先祖の供養が今親孝行することより大事だと述べている。

ウ 『徒然草』第三十段は、死者への無関心は悲しいと述べているが、【文章Ⅱ】は、死後のことを考えるのは無意味だと述べている。

エ 『徒然草』第三十段は、死者への無関心は悲しいと述べているが、【文章Ⅱ】は、死後のことを考えるのは有意義だと述べている。

問十八 次の文章は、村上春樹の小説「螢」の一節である。これを読んで、☐X・☐Yに入る文字の組み合わせとして最も適当なものをあとの【語群】から選び、記号で書け。その際【文章I】の『徒然草』第百五十五段』を踏まえること。

僕の中には何かしらぼんやりとした空気のようなものが残った。そして時が経つにつれてその空気ははっきりとした単純な形をとりはじめた。僕はその形を言葉に置きかえることができる。こういうことだ。

☐Xは☐Yの対極としてではなく、その一部として存在している。

言葉にしてしまうと嫌になってしまいくらい平凡だ。まったくの一般論だ。しかし僕はその時それをことばとしてではなくひとつの空気として身のうちに感じたのだ。文鎮の中にもビリヤード台に並んだ四個のボールの中にも☐Xは存在していた。そして我々はそれをまるで細かいちり、みたいに肺の中に吸い込みながら生きてきたのだ。

僕はそれまで☐Xというものを完全に他者から分離した独立存在として捉えていた。つまり「☐Xはいつか確実に我々を捉える。しかし逆に言えば、☐Xが我々を捉えるその日まで、我々は☐Xに捉えられはしないのだ」と。それは僕には至極まともで論理的な考え方であるように思えた。☐Yはこちら側にあり、☐Xはあちら側にある。

しかし僕の友だちが死んでしまったあの夜の境として、僕にはもうそのように単純に☐Xを捉えることはできなくなった。何故ならあの十七歳の五月の夜に僕の友人を捉えた☐Xは、その夜僕をもまた捉えていたのだ。

(注) 文鎮の中にもビリヤード台に並んだ四個のボールの中にも——僕と友人がビリヤードに興じたその日の夜、友人は死んだ。僕は警察に事情聴取され、そのとき取調室に文鎮が置かれていた。

【語群】				
ア	X	生	Y	老
イ	X	生	Y	病
ウ	X	生	Y	死
エ	X	死	Y	病
オ	X	死	Y	老
カ	X	死	Y	生

問十九 次の【文章】を読んで、あとの【問い】に答えよ。なお、傍線部①の和歌は『徒然草』作者の詠である。

(設問の都合上、文章には省略した箇所がある。)

【文章】

① 夜もすずし寝覚めのかりほ手枕も
真袖も秋に隔てなき風

という歌も、有名です。これは、^(注1) 頓阿^{とんあ}という友人に宛てた歌なのですが、各句の最初の文字をつなげると「よねたまへ^② (米給へ)」。最後の文字をつなげて下から読むと、「^③ ぜにもほし (錢も欲し)」。^(注2) ということで、おそらくは通世中に喰うに困った時があつたでしょう、食べ物とお金を無心する歌。

④ この歌に対して頓阿は、やはり同じ手法を使って歌を詠んでいるのです。確かに「金送れ」と愛想の無い文を送るより、さりげなく歌を送る方が無心の手法として気が利いており、頓阿としてもなにがしかの融通をきかせる気持ちになったのかもしれない。

(酒井順子^{さかいじゆんこ}『徒然草REMIIX』による)

(注) 1 頓阿——鎌倉時代後期から南北朝時代の僧侶・歌人(一二八九―一三七二)。

2 通世——俗世間の煩わしさから逃れて、静かに暮らすこと。

【問い】

傍線部①「夜もすずし寝覚めのかりほ手枕も真袖も秋に隔てなき風」は男の立場で詠まれたもので、現代語訳は次の通りである。

よもすすし 《現代語訳》 夜も涼しくなってきた。

ねさめのかりほ 夜中に目が覚めた(ひとり寝の) この仮庵で、

たまくらも 手枕する私の腕にも

まそでもあきに 袖の中にも、秋の

へたてなきかせ 風が隔てなく吹くことよ。(ああ、あなたが恋しい。)

傍線部④ 「この歌に対して頼阿は、やはり同じ手法を使つて歌を詠んでいる」とあるが、頼阿が女の立場で詠んだ返歌は次の通りである。

夜も憂し 寝たくわが背子 果ては来ず なほざりにだに しばし問ひませ

《現代語訳》（ひとり寝の）秋の夜は長くつらい。一緒に夜を過ごしたいあなたは（来る来ると言いながら）とうとう来ない。気まぐれでも良いから、ちよつとぐらい訪ねてくださいな。

さて、傍線部②「よねたまへ」・③「ぜにもほし」に対する頼阿の返答をわかりやすくひらがな五字でそれぞれ書け。

問二十 次の和歌は、福井の歌人、橘曙覧（一八一二～一八六八）の詠である。 Z に共通して入る適当な言葉をあとの【語群】から選び、記号で書け。

Z あき米櫃（注）こめびつに米いでき今一月ひとつきはよしといふとき

Z 錢ぜになくなりてわびをるに人の来りて錢くれし時

Z 物をかせて善き価値あたひしみげもなく人のくれし時

（注）あき米櫃——空の米櫃。「米櫃」は、米を入れて保存する箱。

【語群】アにくしみは

イせつなさは

ウたのしみは

エさびしさは

令和七年度 仁愛女子高等学校入学試験問題 国語 解答用紙

問 →	問 →
(b)	(a)
(d)	(c)
	(e)

問四	
問五	
問六	

[illegible][illegible][illegible]

問十二

	問一	
	問二	
	問三	
	問四	

問六	
問七	

問九	
問十	
問十一	

	問十三	
	問十四	
	問十五	季路問事鬼神

	問十七	
	問十八	

傍線部②「よねたまへ」への返答	
傍線部③「ぜにもほし」への返答	

--